

「夢中酔舞」をめぐる

小田 幸子

〔邯鄲〕の「夢中酔舞」は、観世流のみの「小書」(替演出)である。通常の演出とどこが異なるのか、あらかじめ要点を簡条書きにしておこう(常の演出との相違を矢印で示した。筑摩書房『能楽大事典』、横道萬里雄『能にも演出がある』、『能を面白く見せる工夫』・松本雍「能の現行小書」等を参照した。()内は替エ)。

- 1, 作り物：引立大宮↓大藁屋
- 2, 扮装：黒頭・法被(唐織壺折ニモ)・半切↓唐帽子・法被(単法被ニモ)・着流。
- 3, 楽：黄渉楽↓盤渉楽。五段↓三段。

「ソラオリ」無く、キリまで台上で舞う。

以上は原則であって、個々の舞台での運用は異なり(たとえば「楽」に「ソラオリ」を入れ、台から降りることもある)、細部においても色々な型がなされるという。ある意味かなり自由度が高い印象である。

このように、現行の「夢中酔舞」は特定の一

箇所の変更ではなく、数種の替をまとめた名称である。そもそも〔邯鄲〕には、とくに舞事関係の替演出が多い。観世流に限っても「藁屋・今合返・盤渉・夢中酔舞・窈・働」の六項目のうち四項目が舞事関係であり、舞のありかたが表現の中心を担ってきたと思われる。また、これらの項目は併用することも少なくない。変更箇所が作り物・扮装・舞事・型と広範囲に及ぶ「夢中酔舞」は、「藁屋」・「盤渉」なども盛り込んだ「邯鄲替演出総合決定版」と呼びたくなるような性格を備えている。

比較的新しいと目される成立事情に関して、山中玲子氏による一連の小書研究、なかでも観世元章関係の論考に考察があるので、以下、私なりにまとめておく(「観世元章の小書をめぐる」・『能楽研究』22号ほか)。

〔夢中酔舞〕の成立には、第十五代観世大夫元章(1722~1774)が深く関与している。元章からの伝授事を弟子の浅井織之丞が

まとめた『元章習事伝授目録』(鴻山文庫蔵)の〔邯鄲〕の項に「夢中酔舞」「虚降楽」「今合返」の名目が掲出されており、これらはすべて元章の父清親から相伝された目録には見えないため、元章オリジナルの演出と考えられる。少なくとも目録の奥書である明和四年(1767)以前に「夢中酔舞」は作られていただろう。ただし、三項目のうち「今合返」以外は、約三十年後に十九世清興が提出した書上『寛政十年諸流名寄秘書』(鴻山文庫蔵)には名目がみえず、一旦は途絶えたようである。

では、元章当時の「夢中酔舞」はどのようなものだったのか。観世文庫蔵の『小書型付』に「邯鄲夢中酔舞」として次の記事がある(松岡心平編集『観世元章の世界』に山中氏による翻刻を収録する)。

コレ^{ツネ}ニハ常ノ邯鄲ノ二段目ノ下ノ末ノ半開ノ^{カシタム}トコロ^{チウスイフ}右エクルリト廻リテ開ク。是ヲ告ニ^{フエフキジ}テ笛吹地ノミヲカヘスノ^{フキ}吹、シテ居テ^{トビム}止ルナリ。委ハ別紙ニ有。

通常の「楽」の二段目オロシの末に、シテが右へクルリと廻ってヒラク型をする。それを合図に、笛は「楽」の「地」のみを繰り返し吹き続け、シテが座ると止めるという。詳細は別紙にあるといい、この記事だけでは不明な点

が少なくないのだが、「楽」の箇所のみに関わる習とみてよからう。また、その内容は現行「夢中酔舞」の「楽」とも違いがありそうだ。

改めて現行について述べると、常より短い三段式の「盤渉楽」で、二段目から盤渉に変わる。通常の五段「楽」では三段目の開キでシテが「ソラオリ」の型をし、その後作り物の台から降りて舞う運びとなるが、この場合は「ソラオリ」が無くなり、最後まで舞台上で舞うのを原則とする。

一方、元章の『小書型付』には「ソラオリ」の記述が無く、トメまでずっと舞台上で舞うように受け取れるので、この点は現行「夢中酔舞」に受け継がれた可能性が高い。おそらくこの習の眼目は、段を取らずに（太鼓のカシラが無く）「最後まで笛が地を吹き続ける」ところにある。印象としては、傷が付いたレコードが同じ旋律を繰り返し奏するのも似て、同じ舞を同じ場所で繰り返している感じがする。調子や、長さや、シテの型は不明だが、シテ次第に笛は見計らうのかも知れない。だとすると、「夢中の舞」のイメージにはピッタリする一方、「舞台上で舞い始め、ソラオリを経て、台から降りて舞い続ける」特有の動きが無いのが、意表を突いている。

次に、扮装と作り物について簡単に検討しておく。

扮装の要点は、黒頭から唐帽子への変更である。黒頭は基本的に男の亡霊用であり、生きている人間が着用する例は本曲と（弱法師）の二番と、（蟬丸）の逆髪が替でバスガシラを用いる程度である。ふさふさとして乱れた黒髪は、煩悶を抱え、旅にやつれた主人公・廬生の状況を表現している。一方、老体の唐人役が専ら用いる唐帽子は、「中国風」ではあるが青年廬生にはあまり相応しくない。古い型付類にはみあたらず、江戸後期の片山幽室系『観世舞曲秘書』（元章系統の型付。能楽研究所蔵）に「黒頭。輪蔵帽子にても」：「掛絡なし二も。輪蔵帽子ノ時ハ必不用。左手ニ水晶類之念珠持。輪蔵帽子ノ時ハ不持」と、替扱いでみえるのが管見に入った。輪蔵帽子（唐帽子の一種で金が入る）を着用する際は掛絡と数珠を使用しないというのだから、仏道への志は表面化されないことになる。

庵室など粗末な住居を意味する「藁屋」を一畳台の大きさにした「大藁屋」は、（大原御幸）や（枕慈童）（ともに観世流）に使用する。天野文雄氏は、これらが元章考案による新種の作り物であるとしたうえで、（邯鄲）の大藁屋

についても、『観世元章相伝作物図』（檜書店蔵）などにはじめてみえることから、「元章の考案の可能性が高い」と述べている（『芸能伝承の世界』所収「芸能と伝承―作り物にみる観世大夫元章の演出改革とその影響―」。「田舎の宿屋という心でしようが、舞台の時間としては、夢の間が長いので、宮殿の引立大宮のほうがいいようです」と横道氏が述べるとおりだろう（前掲書）。

以上のように、現行「夢中酔舞」は1く3のすべてについて、元章関係の替演出を何らかの形で継承している可能性が高い。一旦は廃れたらしい元章作「夢中酔舞」と作り物や扮装の替を合体して再編成したと推測される（「夢中酔舞」の全体は、見慣れた定番演出を大胆に変えているが、一曲の根幹にかかわるといふより、目先の変化を狙った面が強い。だが、目先の変化が低俗とは限るまい。たとえば、同じ料理でも器や盛り付け方を変えてマンネリ化を避けるように、（邯鄲）に新しい器を与え、その中で役者は工夫を凝らし、観客はそれを楽しむというのが、替演出「夢中酔舞」の性格だと思われる。

（能狂言研究家・日本大学芸術学部非常勤講師）